九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遊女評判記の世界 ： 『色道大鏡』と延宝版『長崎土産』

若木, 太一
長崎大学環境科学部教授

https://doi.org/10.15017/9377

出版情報：語文研究. 86/87, pp.15-29, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

遊女評判記の世界

――『色道大鏡』と延宝版『長崎土産』――

若木太一

一　はじめに

昔しの人の袖のかほるより、今の太夫まさりて、上林の家の風をぞ吹し侍る。ことには衣装の物ずき、能事はよしと、人はいふなりと、素仙法師の語りぬ。

これは『好色一代男』巻七の二「末社らくあそび」の冒頭である。京島原の上林五郎右衛門抱えの太夫薫は初代から名妓のほまれ高く、人気がある上座の太夫が代々その名をゆずりうけた。世之介の年代記にあてはめれば、寛文十二年（一六七二）五十歳のときの話であるから、これは寛文十年春その名を継いだ四代目の薫ということになる。

衣装をこらし、美しく着飾った薫は上林家を繁昌させた。白繻子の袷に女流絵師狩野雪信に秋の野を画かせ、これに公家衆八人に銘々書きさせた着物をおしげもなく着こなした。「京なればこそ、かほるなればこそ、思ひ切たる風俗」と話題騒然、昔の薫より今の薫はもっとすばらしいと評判だった。素仙法師すなわち藤本箕山もこの薫のお洒落をほめて「良いことは良いと、人は言いますよ」と語ったのだという。ここは「人はいふなり」の喜撰歌をふまえる。

その箕山の『色道大鏡』巻十六道統譜に、この四代薫は「諱済子、禿名は三弥、暉子薫につかふる。寛文七丁未正月廿日出世して、太夫職に任す。暉子薫これをみちひく。はしめの名は左門といふ。暉子退出已後、左門をあらためて薫と号す。延宝四丙辰十二月卅日、姐子三笠に名をゆづりて、郭をしりそく」とある。また巻十七扶桑列女伝の「三世薫伝」末尾に「奇なる哉薫名三代に及び、同家に連続して而然も繁栄前代よりも増長せり。此の後此の名を継ん者、是唯三弥か」（原漢文）と、まだ次代の継承者も決まっていない時に四代目に推奨しているのであるから、そうとう目立つ存在だったのであ

ろう。

ところでこれは、世之介様ご一行の願西・神楽・鸚鵡・乱酒ら末社四天王ら九人で揚屋の通りをはさんで物真似、文作の酔狂や悪ふざけの芸尽しをして、金をまいても止まらず、さすが都の人心で鉢開きらにもっていかれたという話である。

こうした虚実ない交ぜの「転合書」に、遊里百科全書や遊女評判記をことごとしく引いて考証するのは見当違いではないかという意見があるかもしれない。しかし西鶴の作品には時代の風俗を写すだけでなく、些細な事実にもとづいて普遍的な「世の人心」を描き出そうとする意識的方法が認められる。こうした物語のなかの人間の真実、それをテーマにした作家の世界を探索するには些細な事実の掘り起こしが必要ではないかと思う。

すでに延宝版『長崎土産』が西鶴の『好色一代男』の一原拠、源泉としてその構想、成立に濃厚にかかわっていることについては私見を述べたことがある。(注1) その際『一代男』は藤本箕山の『色道大鏡』の内容とも深く関わっていることを述べ、この延宝版『長崎土産』と『色道大鏡』との関わりはどうなのかを検討課題として残しておいた。それは次の二点である。

1.『長崎土産』もまた箕山の著作ではないか?という従来からの未解決の問題についての考察。

2.『色道大鏡』と『長崎土産』との比較検討を通しての遊女評判記の情報の質の検証。

一般にわれわれは『一代男』にかぎらず、浮世草子に登場する遊女やその舞台となる遊郭の話題についての考証に遊女評判記を参観したりするが、それはどの程度有効なのであろうか。嶋原、新町、吉原など三都の遊郭をはじめ地方遊郭まで、いくつかの型の評判記があるのでそれぞれ個別の質的調査が必要であろうと思う。小稿は、こうした評判と読物との両様のおもしろさ、遊女名尽としての情報性・記録性、いいかえれば戯作性と功利性をあわせもつ情報誌とでもいえる遊女評判記の、一つの地方遊郭の事例について見てみようとするものである。

ちなみに『長崎土産』と称する本は三種が知られる。一は、ここでとりあげる遊女評判記の延宝版『長崎土産』大本六巻五冊である。その二は、長崎の名所を文人諸家の詩歌で飾った地誌の『長崎土産』半紙本二冊(礒野文斎編著、画。弘化四年長崎大和屋由平刊)、その三は、近代以降の輸入品商いの老舗などを網羅した案内記の『昭和版長崎土産』洋装本一冊(渡邊庫輔著、同刊行会昭和八年九月刊)である。いずれも鎖国時代の窓口であった長崎の異国風文化を案内し伝える出版物で、開国以後もその情緒を伝え、余風を今に薫らせてくれる。

二　箕山『色道大鏡』の編纂

『色道大鏡』十八巻十四冊と著者藤本箕山については、野間光辰氏による同書箕山自筆の完本の翻刻、影印版およびその解説、詳細な追跡調査「藤本箕山の生涯」と伝記資料等が備わる。(注2)

それに従えば、箕山は寛永三年（一六二六）京都で誕生、宝永元年（一七〇四）七十九歳で没した。別に遠祖の畠山姓を名乗ることもあり、名を七郎左衛門、字を盛庸、号を箕山、別に素仙・琢斎・哲斎・幻々斎・呑舟軒・遮莫堂などとも称した。また、古筆目利きとして了因と名乗った。少年時に両親と死別、十三歳のころから「遊宴の悪風にふかれて花肆の色門に入」（『まさりくさ』序）という。正保三、四年ごろ破産し、大坂に移住。貞門系俳書『毛吹草追加』『昆山集』などに盛庸の号で参加している。第十四雑女部の第二十六曹伽付牧田の項に「先師貞徳出座せられし俳諧の会に」同席し、末吉道節の付句に対して貞徳が「あまり作過候」と難じた話を記している。京都在住時から彼に師事していたらしい。その後明暦・万治・寛文のころ、『鸚鵡集』『玉海集追加』『詞林金玉集』などに入句（野間氏編「新編箕山句集」）。承応三年（一六五四）二十九歳のころ色道書『深秘決断抄』の編著を目指して、東西諸国の遊郭・遊里の探訪・調査の旅に時おり出かけている。その畢生の著作『色道大鏡』十八巻は、箕山五十三歳の延宝六年十月の成稿（吉夢也翁序文）である。一方、承応元年三月『明翰抄』二十六冊と題して古筆・名筆の諸家略譜を編纂、さらに寛文四年八月『名伝類纂』十冊を編んでいる。元禄元年春には増補して『顕伝明名録』十五冊を編纂した。

さて、箕山の諸国遊郭の旅は『色道大鏡』の凡例によれば、二十歳のころから本書編纂を思い立ち、「諸方の風俗、人伝にのみ聞ては、くはしく勘弁しがたきがゆへに、或は関東にはしり、或は中国より九州にわたり、其郭辺に経歴して、所々の風儀をうかゞふ。畿内小地の遊郭は、累年これを見をよび、六条の過しむかしは、古老の達人に事を尋ねてしるす。しかはあれど、時節のうつるにしたがひ、風俗もかはりもて行ば、是をくはしくわきまへしらんがために、人のそしりをかへり見ず、老年にいたるまで、当道に立まじり、諸郭をめぐりて、此書をしるしぬ」と、東西南北、都鄙を歴遊し、長年にわたって見聞を加筆し続けたことを記している。跋文には「洛下近衛の遮莫堂にして書」とあり、最終的には京都において執筆したことがしられる。年月は記されていないが、貞享末から元禄初年のころには帰京していたかと思われる。

知られるように巻一名目抄は、人倫・家屋・時節・器財・態芸・言辞の六門から成り、たとえば『和名抄』以来の辞書風の編纂に倣う。以下巻二寛文格、巻三、四寛文式上下、巻

五二十八品、巻六心中、巻七翫器、巻八音曲、巻九文章、巻十定紋、巻十一人名、巻十二、十三遊郭図上下、巻十四雑女、巻十五雑談の各部、および巻十六道統譜、巻十七烈女伝、巻十八無礼講式・諫言篇などから成る。こうした彼の、時間と金と労力を費やしての諸郭探訪、蒐集した資料・聞書きをもとにした考証・編纂の耽溺ぶり、さらには、その質量と注がれた情熱には人を圧倒する意志を感じさせる。

かつて阿部次郎氏は「その志すところの珍しさと、これに捧げられた努力の真摯な点とにおいて、天下希に見る書の一つである。彼がこの書において志すところは、遊里の内面的（道徳的という言葉を用いることもできるであろう）立法である。彼は、政治家の遊郭政策とは全然異なれる意味において、理想的な「遊び」の道をいわゆる「色道」を一建立するために、その生涯の最も多産なるべき三十余年をささげた」[注3]と評した。これにたいして野間氏は「或る意味からいえば、彼の志は憐れむべき敗残者町人の最後の焦燥であり、彼の努力は愚かなる徒労に過ぎぬと見られないこともない」と言いつつ「彼箕山の生涯に、私は激しい町人的精神[注4]の高揚と情熱の沈潜を見いだすのである」と述べている。また一方では、これを「貴重なる人間記録（ヒューマン・ドキュメント）」であり、「或る意味に於て、自由なる町人的精神が封建的世界の支配から戦いとった重要な獲物である」という評価もしている。[注5]これを平たくいいなおせば、傾城遊びの理論・様式化もしくは「粋」の美学化、近世前期の遊郭の歴史・百科全書、あるいは悪所文化の神髄を極めた大冊などとみるさまざまな毀誉褒貶が背後に見え隠れしている、ということであろう。その達成にたいする諸角度からの、やや持て余し気味ながら正・負いずれも妥当な箕山評がうかがえる。

では箕山にとって、色道学をうち立てる意味とはどのようなことであったろうか。私見を付け加えておけば、彼は人間の欲望を「粋」という美意識に象徴化し、論理化した「色道」という名目を規範と様式を整えて確立し、それを伝統的「道」の概念に新しく付け加えようとしたかと思うのである。「其貫道するものは一なり」（『笈の小文』）と言ったあの芭蕉のきまじめな精神にどこか通じるものがある。とはいえそこには、遊興の「道」をうち立てようとする壮大な戯作精神ともいうべき基調が深層に潜んでおり、「遊び」にたいする真摯な柔軟さとでもいえそうな気分が漂っている。

『色道大鏡』という書名が表象するのは、大時代的な古風さである。やがて萌芽してくる、想像力に富んだ、技巧的でやわらかな近世中期のあの戯作精神とは、当然のことながら、かなり距離がある。

箕山は、金銭を浪費し、生身の体を消耗する「遊び」を、嶋原遊郭すなわち「みやこ」の寛文時代の格・式を規範として手順・応対の技巧、洗練の理想的型を様式化した。その規範と様式を基準として地方遊郭と遊女たちを評判する。古代

からの律令・格式になぞらえ、故実に拠りながら遊女の地位・階級を定め、風俗・参会・応対のちがいを説き、遊郭で働くものたちの職制・仕事を明らかにし、新旧の遊里語を解説する。そこでの遊戯的人間模様を演出、展開する舞台（ステージ）である遊郭の有機的総体とその核心を価値づけする当代の美意識「粋」の規範とを「色道」の「大鏡」として書き残そうと意図したようだ。本書は、嶋原を始めとする三都及び諸国の遊里・遊郭を実地に調査・見聞し、「郭中の図」や発祥の経緯、流行や世代交替までを記したルポルタージュであり、歴史・文化資料として、そしてなによりも仮名ではあるが一人一人の遊女たちの存在、その風貌、個性までも記録したという点でも希有の情報誌といえよう。過去の名妓たちの雑談・伝説を蒐集し、諸家の道統譜・列女伝・定紋をも考証・注釈して、さまざまな女たちの実在を説き明かしている。

箕山はまた了因と名乗る古筆目利であり、その目で諸国の遊郭と遊女らを鑑定した。『色道大鏡』がただの遊女評判記に終わらなかったのは、その眼識をもとにした構想の規模と広範な調査の徹底によるものであり、さらには諸国遊郭の発生と歴史、そこを舞台に活躍した多くの遊女たちの記録を残そうという、その情熱と意志の持続によるであろう。その探索、博捜の努力と様式の構想化、集大成への執念は『明伝類纂』『顕伝明名録』などを編纂したのと同じ学者的方法によく顕れており、その生活の大半を費やした趣味的な耽溺が大いに幸いしたかとも思えるのである。

三　箕山の西国・筑紫路への旅

箕山の九州への旅の日時がはっきり記されているのは、『色道大鏡』巻第十五雑談部の次の記事である。

> 甲寅の夏、おもひたちて筑紫をめぐりしに、陽月にをよび肥後の城下にいたる。旅館を構へ月を越てありしに、あたりちかき町人の富る者と聞しが、愚老を慕ひ来ておりおりかたる。

箕山は、甲寅すなわち延宝二年（一六七四）夏に九州を訪れ、十月に肥後熊本に至り月を越え十一月まで滞在している。ここで箕山は二十歳ほどのうぶな男に出会う。この若者は熊本から外へ出たこともなく、風流を慕う気持ちはあるが国法厳しく、これまでまことの傾城というものを見たことがないという人物であった。先ごろ上方の商人が持ってきた「お山人形」をさして、彼はこのようなものかと尋ねたのだという。「此人を上方にて聞たらば異国人のやうにこそおもはめ」とあきれた話を記している。

また巻十三の遊郭図下のうち第十七播磨の室津の条で「室津遊郭記」を書き付け、「時延宝第二季夏中浣、室津の独座亭にして書く」と記す。すなわち箕山は同年六月半ば室津を訪

れている。さらに同巻第十八備後国鞆の図には「右之図延宝二年ニ改」とあり、同巻第十九長門国下関稲荷町之図にも「延宝二年ニ改」と記す。これらは以前の調査に再調査の情報を付け加えたり、改訂したりしたことを意味しよう。巻第十五雑談部には、その日暮らしをしている与作という四十歳ばかりの男（赤穂の土民で本名は清九郎）の遊びぶりを書いている。この男は寛文十二年夏のころ室津に流れて来て、働いた金をみな傾城に施した。その翌年延宝の初年には三十余日の労賃を天職との一夜の出逢いに費やした。箕山は「其時節予室に居り合て、此事を聞しままに、此男を需め出して九拝す」とその男に面会したことを記す。

さらに同巻第九大和国奈良木辻町は「木辻鳴川之図延宝二年ニ改」とあり、同巻第十二堺津守南高洲町には「右堺南北之図延宝三年ニ改之」、同巻第十三摂州は「大坂瓢箪町之図延宝四年ニ改之」と記す。これも『色道大鏡』をまとめるに際し、正確を期すため箕山は再調査を行い、轡の代替わりや遊女の出入りなど新しい情報を盛り込んだのであろう。

つまり、ここに記されているこれらの年月、日時は箕山が西国、九州の遊郭を探訪した足跡と見てよいだろう。箕山は寛文十二年秋、江州大津の遊郭を訪れた。延宝二年春ごろは奈良木辻町を訪れた。同年初夏のころに西国遊郭の探訪へ旅立ち、まず室津に六月中旬までいた。その後九州へ向かい同年十月から十一月までは肥後熊本に滞在した。そして年末もしくは翌延宝三年春のころに長崎を訪れたのではなかろうか。長崎での取材の痕跡は十カ所ほどに及ぶ。そのうちの一つに『色道大鏡』巻二寛文格「遊客参会法」遊女の煙草のたしなみについて述べたところで、漳州人林驥官筆の「煙草七徳」を「長崎にて見たり」と記した箇所がある。この人については『唐通事会所日録』寛文九年十一月二十四日の条に記事がある。浙江省普陀山から来航した参拾五番船に乗っていた唐僧である。当時すでに、唐僧の渡来は御停止で許されなくなっていた。彼は何度か失敗をしたうえで、同船の相船頭と称して来航したものの、取り調べられ帰唐を命じられた。箕山の見た筆跡が林驥官の真筆だとすれば、きわめて珍しいものであったわけである。

この時期の箕山の足跡を一覧すると次のようになる。

寛文三年（一六七二）秋、江州大津の遊郭を訪れ、煙草をのむ傾城を見る。

延宝元年（一六七三）この年室津にあって与作という男に会ったか。

延宝二年（一六七四）この年春ごろに奈良木辻町を再訪し遊郭図を改訂した。

夏六月、中国から九州地方へと遊歴した。六月中旬室津を訪れ「室津遊郭記」を執筆、その後備後国鞆の津有磯、下関稲荷町遊郭を尋ね、十月から十一月

にかけて肥後熊本城下に滞在。この後、年末もしくは翌年春ごろ長崎に赴いたか。

延宝三年（一六七五）この年、堺津守南高洲町を再訪し、遊郭図を改訂した。

延宝四年（一六七六）この年、大坂瓢箪町を訪れ遊郭図を改訂した。

この延宝初年以来の足跡をみるかぎり、箕山の旅はすでに趣味の域を越えており、再訪を含め諸国の遊郭の実態調査ともいうべき目的での取材旅行を行っていたとみてよいであろう。もちろん畢生の大作『色道大鏡』の編纂、執筆を進めていたからで、諸国の遊郭図、その濫觴や歴史、所の風儀・風俗、名妓の伝説、諸家の遊女の評判などについての正確な情報を集め廻ったのであろう。箕山はその跋文に「世間流布の双紙は、虚言をもとゝして詞滑なれは、…」といった類のものだが、「物の格式を定め後の鏡にすへしとならは、実を尽さすしてはおもひたつ本意ならすと、一片の戯言をもましへす書きたてゝ終に其功成ぬ」と書いている。これは古筆家、考証家としての箕山の姿勢を示す文章である。

四『色道大鏡』と『長崎土産』の時代差

藤本箕山の中国・筑紫の旅は、前章で足跡を辿ったように延宝二年（一六七四）夏六月から秋冬、もしくはその期間を大目に見て翌三年の春頃までの間と推測できよう。

ところで周知のように延宝九年（一六八一）八月刊の『長崎土産』の著者はこの箕山、挿絵は吉田半兵衛ではないかとする説[注6]がある。『長崎土産』半紙本五巻五冊（巻末に追加を付す）は「延宝九辛酉六月吉日／長崎住」と序文に年月があり、漢文体の跋文に「辛酉八月／前悪性大臣嶋原金捨」とある。著者、版元、刊行年などは不明である。ところが長崎の丸山遊郭の記述の内容や情報はその年月の近さにもよるが、『色道大鏡』のそれ（後掲の長崎丸山遊郭家壁図）ときわめて近似している。こうしたところから箕山説が生まれてきたものと思われる。

これについて野間氏は、「延宝七年夏初めて長崎に下ったという『長崎土産』の著者に、延宝六年十月『色道大鏡』成稿以前に於て既に長崎に歴遊した事のある箕山を以て、それに擬するということは、いささか早計の譏りを免れないであろう」と述べている。その上で「ただし現存本には、延宝六年以後に於ける補記の部分があるのではないかと思われるところがあるから、しいて『長崎土産』箕山著作否定の主張を通そうというのではない」と注を付し、含みをもたせている。[注7]その野間氏の保留の理由は、『色道大鏡』巻六「心中部」第五「切指篇」に阿蘭陀流金瘡の名人栗崎道有という外科医に出会っている記事にもとづく。この道有は二十九歳の時に幕府

医官となり元禄十四年に吉良上野之助の傷の治療をした人物である。それゆえ「箕山が長崎で道有に会ったのは、延宝六年以後少なくとも元禄元年までの約十年の間のことでなければならない」というのである。

私の結論も藤本箕山は『長崎土産』の著者ではない、ということである。『長崎土産』についての野間氏の前半の推測は妥当である。しかし後半の『色道大鏡』の中国・筑紫への旅の記事で、箕山が栗崎道有に出会ったのを「延宝六年以後」するのは無理であろうと考える。以下、いくつかの理由をあげて考証する。

I、阿蘭陀流金瘡の名人栗崎道有

『色道大鏡』巻六「心中部」第五「切指篇」に箕山は「指をそぎ切にしてよきといふ証拠を、予長崎にて見たり。或女郎、子細ありて指をきる。爪のはえぎはより上のふしをかけてそぎたり。阿蘭陀流金瘡の名人栗崎道有といへる外科、是にかゝりて療治したりしが、四十日程して、指の腹に肉をもちて、むかしの長に生出たり」と、その不思議な西洋医術を書き付けている。

箕山が出会った「栗崎道有」を、野間氏は吉良上野之介の傷を治療した道有正羽を宛てているが、はたしてそうであろうか。この道有正羽は元禄四年（一六九一）六月十九日幕府の招聘をうけて官医となり、将軍綱吉に謁し番医を命じられた。享保十一年（一七二六）十月二十日没、享年六十七歳である。[注8] 逆算すると延宝二年（一六七四）はまだ十五，六歳の少年であり、遊女の指を治療した医師とするには無理がある。では誰かといえば、この「名人」は正羽の父道有正家であろう。栗崎流外科の祖は道喜で、長男は道喜（正元）で次男道悦（正幸）、三男道保、四男が道有（正家）である。長兄をはじめ次男、三男も諸家に抱えられ、道有正家が長崎に住んで第三代栗崎流外科を継承した。道有正家は延宝九辛酉年八月十三日没、法名「光巍院道有正家居士」である。[注9] 年五十に満たないで逝ったという。とすれば延宝二年、箕山が長崎を訪れた時出会った道有正家は円熟期の四十代半ばであり、「阿蘭陀流金瘡の名人」と称されても妥当な年齢である。すなわち箕山が書いた第五「切指篇」の記事、「或女郎」の指の再生を可能にした長崎の阿蘭陀流の名医道有に出会った話は、「道有予に語ていはく」と記すとおり延宝二年ないし翌三年の事実と見るのが妥当であろう。

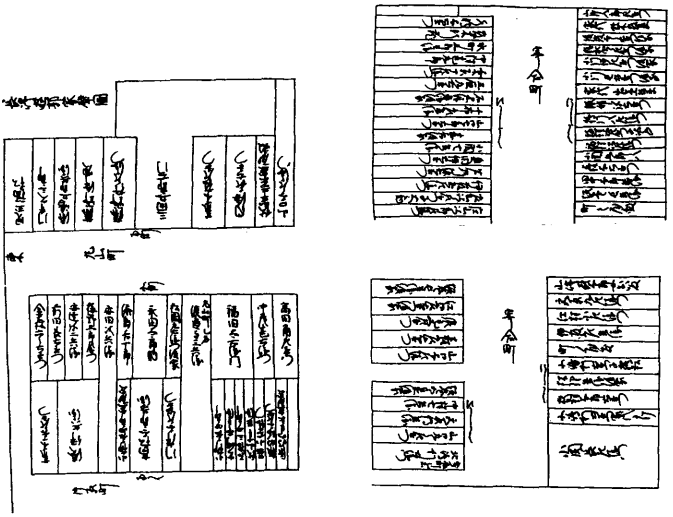
II、「長崎丸山遊郭家壁図」（『色道大鏡』）と「丸山・寄合町遊郭図」（『長崎土産』）

どちらも同じ丸山遊郭を図示しているが、『色道大鏡』の「家壁図」と『長崎土産』の「遊郭図」との違いは約五年間の時代差である。

A「長崎丸山遊郭家壁図」（『色道大鏡』）―延宝二，三年頃の調査（**図1**）

B「丸山・寄合町遊郭図」（『長崎土産』）―延宝七，八年頃

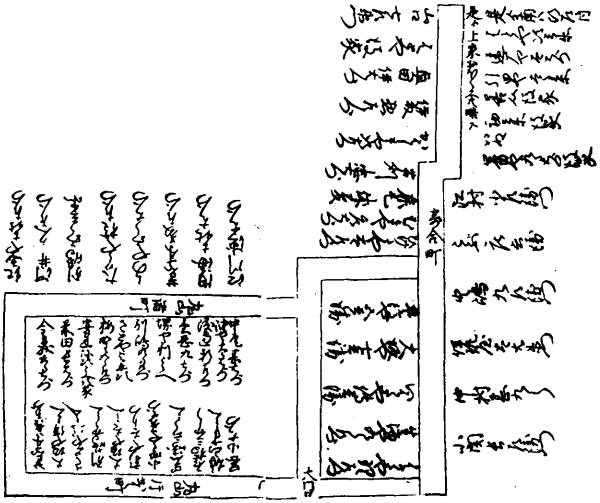
A「長崎丸山遊郭家壁図」(『色道大鏡』)―延宝二，三年頃の調査（図１）



［丸山町］
［北側］
1 添島五郎兵衛貸座敷
2 服部弥三左衛門
3 岡小右衛門
4 秋山半兵衛
5 石橋三四郎
6 岩崎六郎兵衛
7 小柳善四郎
8 丸山町乙名／渡邊与三兵衛
9 川岸太左右衛門
10 高松太郎兵衛
11 小柳善四郎貸座敷
12 安田次兵衛
13 湊伊兵衛
14 荒木善左衛門
［南側］
15 高田角左衛門
16 中尾甚右衛門
17 福田太右衛門
18 松岡九左衛門後家
19 永田太郎助
20 添島吉十郎
21 梅野五郎左衛門
22 安達弥二兵衛
23 前田長右衛門
24 金森六郎右衛門
25 山口太郎左衛門
26 秋山半兵衛貸座敷
27 内海喜右衛門
28 荒木藤左衛門
29 三田五郎右衛門
30 藤野権左衛門
31 藤野淳順
32 添島五郎兵衛
33 川井久三郎
34 児玉福松

［寄合町］
［東側］
1 寄合町乙名／北嶋利右衛門
2 山口九郎右衛門
3 宮原伝兵衛
4 中村七兵衛
5 坂巻五郎兵衛後家
6 山口太左衛門
7 森庄右衛門
8 鹿毛又左衛門
9 江口庄右衛門後家
10 坂巻長兵衛後家
11 庄山次郎左衛門
12 庄山次郎左衛門子犬之助
13 伊藤惣左衛門
14 芦刈源右衛門
15 奥田伊右衛門
16 小関七兵衛
17 善吉後家
18 山口七郎右衛門
19 千布彦兵衛
20 石黒清兵衛後家
21 三原九右衛門
22 桑原十左衛門
23 中村甚九郎
24 水町三郎兵衛
25 藤木新蔵
26 水島太右衛門
［西側］
27 小関長左衛門
28 北嶋利右衛門家代たけ
29 杉村太郎右衛門
30 林理兵衛後家
31 北嶋利右衛門子鶴松
32 町ノ屋敷
33 伊藤庄兵衛
34 江村小左衛門
35 宮原九左衛門
36 山崎喜太郎女おいぬ
37 坂巻長兵衛
38 田中太郎兵衛
39 森太右衛門
40 小関五郎八
41 福村次左衛門
42 福村次左衛門子次右衛門
43 鶴川八左衛門
44 服部弥右衛門
45 家代山口木工兵衛
46 小川長右衛門後家
47 小川伊左衛門後家
48 清水四郎左衛門後家
49 後藤太郎右衛門後家
50 家代鈴木藤兵衛
51 山片八郎左衛門

B「丸山・寄合町遊郭図」(『長崎土産』)―延宝七，八年頃の調査（図２）



［丸山町］
［北側］
1
2
3　(同)
4　(同)
5　(同)
6　(同)
7 小野や善右衛門
8 渡邊新左衛門
9 新や太郎右衛門
10 大坂や太（郎）兵衛（同）
11 嗣島四郎兵衛
12 さとや次兵衛（同）
13 大坂や伊兵衛（同）
14　(同)

15
16　(同)
17 油や太右衛門（同）
18 松岡九郎右衛門
19 堺や利兵衛
20 嗣島九郎左衛門　　○さとや与兵次
21　(同)
22 安達弥次兵衛後家
23　(同)
24　(同)
25 江川徳右衛門
26
27　(同)
28　(同)
29 みのや五郎右衛門（同）
30 たはらや権左衛門（同）
31
32 嗣島五郎兵衛（同）
33 河合久左衛門
34 紀国や喜左衛門

［寄合町］
［東側］
1 はかたや理左衛門
2 生酒屋九郎左衛門
3 いはたや伝兵衛（同）
4 大坂屋七兵衛（同）
5 豊後屋五兵衛（同）
6 ひけたや太左衛門（同）
7 むきや森庄右衛門（同）
8 鹿毛休夢（同）
9
10
11 かはしまや次左衛門（同）
12
13　(同)
14 芦刈忠右衛門
15　(同)
16
17 はとや後家（同）
18 山口七左衛門
19（千布百之介）
20（同）
21（宇田喜兵衛）
22（同）
23（銀右衛門後家）
24
25
26

27　(同)
28 中村甚九郎（23 から移動）
29 伊勢屋太（郎）右衛門（同）
30
31 北嶋九左衛門
32
33 こぶ庄兵衛（同）
34　(同)
35 岩田屋九郎右衛門後家
36 勘兵衛後家（同）
37 善介後家
38 引田や太郎兵衛（同）
39 遠塵や太右衛門（同）
40 いぬ
41 はとや次兵衛（同）
42 福村次右衛門（同）
43
44　(同)
45
46
47
48　(同)
49　(同)
50
51 山縣八郎左衛門（同）

の調査（図2）

まずA「長崎丸山遊郭家壁図」（『色道大鏡』）を基準にしてB「丸山・寄合町遊郭図」（『長崎土産』）に相当する郭をあてて、その変化を見てみよう。

丸山町は全三十四軒中、変化なしがおよそ十八軒、息子・後家等に代替わりしたのは七軒、その他経営者が替わったか廃業などが九軒である。

寄合町は全五十一軒中、変化なしがおよそ二十二軒、代替わり八軒、経営者の交替または廃業が二十一軒である。

この数値は『長崎土産』の著者の調査もれなどもあろうから（「追加」の分も加えてはいる）およその数であるが、この五年余の間にどちらの町も半数以上が世代交替や経営者が替わったりしている。華やかな一面、激しい有為転変が知られる。遊女たちも流行り廃りに一喜一憂し、若くして病死にいたるものも少なくなかった。『色道大鏡』道統編などに記された彼女たちの年齢は、そのことを明瞭に物語っている。

ところでAとBは同じ遊郭の図を画きながら違いがある。Aは姓名を書き出しているが、Bは多くは屋号をまじえている。またAでは「添島」「川井」だがBでは「副島」「河合」などのように表記が異なる。Bは出版物だからということが考えられなくもないが、他の徴証などを勘案すると取材をした人物が違うとみるのが自然であろう。

Ⅲ、「公儀者」加州と呼ばれた遊女

このA、B二つの図の時代差を明瞭に示す事例を次に掲げておこう。

まずA「長崎丸山遊郭家壁図」（『色道大鏡』）のうち8「丸山町乙名／渡邊与三兵衛」はB「丸山・寄合町遊郭図」（『長崎土産』）では8「渡邊新左右衛門」と代替わりしている。これには、どのような経過があったのであろうか。

『長崎土産』巻四に次の評判が出ている。

渡邊新左衛門

一　加州　　年十八

すがたかたちさのみよからねど、すぐれて利根利発もの也。人をころす事砒霜斑猫よりすみやか也。つよきときは阿蘭陀の万力もくだけ、やはらか成折は唐綿の上にころぶがごとし。酒よくのめ共みだれず、物よくいへ共とゞこほらず。所の人異名を公儀者と云ふ。是は、此家にちかき比まで石州と云し上手に付たる人にて、風味上々吉。磁石に蛸の取付たるがごとし。

問、公儀者と云事いかゞ。答、先年檀那与三兵衛きりころされし時、此人御奉行所の白洲に出て、一々諸わけを詰開きて、終に与三兵衛が相手をころしてけり。其後所の人公儀者と申也。遊女のはやるは、さのみ良形のすぐれたるにもよらぬと云事、此人証拠成べし。精出すべし。

この加州という十八歳の遊女は、さほどの美形ではなかったが「利根利発」で「上々吉」と評判され、異名を「公儀者」

と呼ばれていた。それは、先年旦那の与三兵衛が殺された時その殺害現場に居合わせ、目撃した一部始終を奉行所の御白洲で証言し、加害者を処刑に追い込んだことがあったからだというのである。

この評判が事実に基づくものであることを裏付ける記録が『犯科帳』にある。

京　金屋喜右衛門下人

一　市　平　巳年三拾壱　　巳十月廿三日籠舎

此者巳十月廿日之夜主人金屋喜右衛門致供丸山町渡邊与惣兵衛宅ニ泊罷有候　然処与惣兵衛令陀行夜中時分ニ帰候而市平臥居候処を杖ニ而叩申候付起上り口論之上彼与惣兵衛を切殺候依之籠舎申付之候

（追）右市平儀穿鑿之上巳十一月十六日ニ令斬罪候　主人喜右衛門儀ハ其身供ニ召連於眼前切殺させ一同ニ立退候段不届候付而為過料本鍛冶屋町ニ石橋新規ニ掛渡候様ニ申付之候

これは延宝五丁巳年（一六七七）十月二十日夜の事件[注10]とその判決を記した記事である。

このころの丸山遊郭は、置屋と揚屋一体の内留め式であった。京都から長崎商いに出張中の金屋喜右衛門は、この夜丸山遊郭渡邊与惣兵衛宅に泊まっていた。そこへ外出していた与惣兵衛が夜中に帰宅し、金屋の下人市平が臥しているのを見付けて杖で打擲した。市平は起き上がり、口論がつのって与惣兵衛を殺害するにいたった。その後、長崎奉行の穿鑿があり、同年十一月十六日、市平は斬罪に処せられた。また主人の金屋はその現場にいて殺害を黙視し、ともに立ち退いたことは不届きであり、その過料として鍛冶屋町に石橋を掛渡させたというのである。

『寛宝日記』によれば翌延宝六年五月、本鍛冶屋町の町名を万屋町と改めるとともに、この石橋は「くさび橋」と名付けられた。なお『寛宝日記』には、この夜の事件が詳しく記されており、与三兵衛は帰宅時に酒に酔っていたこと、下人市兵衛（ママ）は以前武家方に奉公していたことがあり、同人は事件の翌日奉行所に出頭してきたことなどが記されている。そして奉行所においては「与三兵衛内女郎三人・喜右衛門・たいこ其外之者共被召寄口御聞被成、先市兵衛事籠舎被仰付候、丸山方より申立候ハ喜右衛門切れと申候ニ付切申候間、相手ハ喜右衛門御取可被下由申立候[注11]」とあり、金屋喜右衛門が殺害を指示したかどうかをめぐって双方の申し立てが争われている。すなわち前掲『長崎土産』の加州という十八歳の太夫が「公儀者」と異名で呼ばれ、「御奉行所の白洲に出て、一々諸わけを詰開きて、終に与三兵衛が相手をころしてけり」と記された評判の背後に、こうした事実がたしかにあったのである。時代はやや下るが『元禄覚書』（「新撰京都叢書」一）人巻「長崎糸割符」の項「京糸割符人数」のうちに五丸宛の年寄として「金屋源兵衛」という名がある。おそ

らく金屋喜右衛門の子孫または一族の者であろう。

また『長崎土産』巻五の「追加名寄」には「一　与三兵衛あと新左衛門　綺麗成事はなけれど、むかしよりやりての仕付よくして行よし。近年小むらさき、加州、いつゝなど出ぬれば、なを〳〵よかるべし。ぬれえんくさくむさし」とある。

これも、その後渡邊与三兵衛の跡目を新左衛門が継いで遊郭を経営していること、建物は古く、むさいが太夫の小紫・加州・井筒らがいてよろしいといったことを評判している。この事件によって渡邊家の代替わりがあった。この事件について延宝六年成立の『色道大鏡』には触れるところがない。箕山は延宝四年に安芸の宮島まで再調査に来ているが、この時には九州へはこなかった。その後来ていたならば、延宝五年十月のこの事件にかかわる太夫加州の健気な話題を、箕山が書き漏らすはずはないと思われるのからである。

五『長崎土産』と西鶴

西鶴の『好色一代男』の主人公世之介の誕生に、『色道大鏡』の箕山の言説とともに『長崎土産』が深く関わっていることについては、すでに論じたが、その他の作品にもなんらかの影響、話題の一端が及んでいるように思う。

貞享元年初夏に刊行の『諸艶大鏡』巻五の四「夜の契は何じややら」は、よくしられた話である。長崎の町離れのある村の乞食が真鍮町（寄合町の異名）に行き太夫金山を思い初め、三年のあいだに衣服をこしらえ、金をため、供をつれ主持ちの遠客と偽って金山に逢った。しかしまもなく「乞食の四郎」ということが発覚し、追い立てられた。すると金山はその夜、着物に欠五器・竹箸・面桶などの諸道具を散し形にして縫付け「世間晴て、我恋人をしらすべし。人間に、何か違ひ有べし」と太夫としての意気をみせた。その座にいた花鳥が「我身も同じ流れなり。（中略）又恋ならば、いかなるものにも情を掛てこそなり」と鉄職にまみえた都の吉野、難病人に身をまかせた江戸の尾崎、座頭に逢った大坂の夕霧らの例をもちだして賞賛した。その後、金山はいっそう流行ったわけだが、ある時秋船が入って菩薩祭を見物に出かけると、道中でかの乞食が投文をよこし、行き方しれずとなったという。

この話題の真偽は確かめえないが、かつくい原という乞食村が存在し、また『長崎土産』巻三「長崎丸山太輔日本行十人女郎合」第一番左方に出る豊後屋五郎兵衛内（B図、寄合町15）の金山に該当する。この判者は本書における情報提供者「はかたや新右衛門後家老尼」と「入角おすき後家尼」の二人である。時代は延宝七、八年のころだが、歳は二十二、「容顔容儀云ばかりなく、末世には稀成ものにて、たとへていはんかたなし。（中略）こぼれかゝる雲の鬢、丹花の口紅粉、ゑもんつき風流に着なし、道中のあゆみは、奥州出しの

正宗の引馬ふむぞはぬるぞと、いはんばかりのいきはり、いかなるわるざまの一つ買なり共、得難じあゆましき事にぞおもはる」とある。右方は伊勢屋太右衛門（B図寄合町13）の太夫出羽であり、両者から難陳それぞれあり「持」なのだが、「金山は立姿少じや〳〵馬也」と意気の強さがいわれている。「夜の契り」の話も虚実ないまぜであろうが、この金山ならさもありなんと思える物語に作られている。その座に居合わせた花鳥も同じ豊後屋の太夫で、歳は十九、「一座のつしりとしておも〳〵敷、初心めかす。顔形もよし。ちとしつほり過たり」などと評された、実在の人である。

『日本永代蔵』巻五の一〈廻り遠きは時計細工〉は長崎商いで出張中の江戸、京、大坂、堺の手代たちが、雨の夜のつれづれに銘々の主人たちが分限になった才覚や方法を語り合うという話である。投銀とまではいかなくとも目利きの手代なら異国船のもたらす珍しい品々を買い付け、都で高く売って大きくもうける算段だが、そううまくはいかない。「長崎に丸山といふ所なくば、上がたの金銀、無事に帰宅すべし。爰通ひの商ひ、海上の気遣いの外、何時をしらぬ恋風おそろし」という。

これは『長崎土産』巻二の尼の言葉「若き唐人などは、長崎の遊女を恋つゝ商にことよせ、渡海するも有よし也。（中略）異国に持帰る銀子を、是がために長崎につかひ捨る事、一ケ年に凡千貫目ほど成よし、又五ケ所の商人、其外隣国の群集も、多は是にひかれて下るといへば、よろづ所の賑ひ云ばかりなし。ことはりしらぬ人は所のついへなどおもはれんを、長崎においては遊女なくては、只今のみつか一つもさかへまじ」という話を踏まえているだろう。丸山遊郭は、長崎に金を落とさせる欲望の装置だというのである。

また同じく『長崎土産』巻二の上記引用の前の部分「長崎は日本西海のはてにて、東国にては蝦夷松前と云に同じ。異国舟の出入なくば、塩焼海士釣の翁も住べき所にあらず。年久敷所に住馴たる者といへども、秋冬の間に年中の渡世をしまつして、春夏はかりにもなすべき家職なし。凡金山の法のごとし。此故にお仕置も広くゆたかにして諸人安堵のおもひをなして、心なきもうる人も日本の住ゐを恋ねがふと云」とあるが、これは『世間胸算用』巻四の四〈長崎の餅柱〉の冒頭「霜月晦日切に、唐人船残らず湊を出て行ば、長崎も次第に物さびしくなりぬ。しかし此所の家業は、よろづからもの商なひの時分銀もふけして、年中のたくはへ一度に仕舞置、貧福の人相応に緩〳〵とくらし、万事こまかに胸算用をせぬところなり。（中略）正月の近づくころも、酒常住のたのしみ、此津は身過の心やすき所なり」の文章に、その雰囲気を投影しているであろう。

西鶴は、箕山や『長崎土産』の嶋原金捨ばかりでなく長崎通いの五ケ所商人のだれそれからも長崎の噂話を聞いたりしたのであろう。そのような断片を核として、あの「金平糖の

仕掛（しかけ）」（『永代蔵』巻一の一）のように物語を作り出したのであろう。そこには「胡麻一粒の種」の発見があり、その冴えた物語制作の手腕がそれを形にしたにちがいない。聴き上手の西鶴ならではの情報収集力というべきだろうが、物語の背後に隠れている事実や実在を、こうした評判記のなかにもかいま見ることができそうなのである。

注

1、「『長崎土産』と『好色一代男』」（『長崎大学教養部創立30周年記念論文集』平成7年3月）。

2、『完本色道大鏡』（昭和36年12月、友山文庫刊）。影印版『色道大鏡』（昭和49年7月八木書店刊）。

3、『徳川時代の芸術と社会』（『阿部次郎全集』昭和36年1月角川書店刊。昭和46年10月刊角川選書版による）前編「畠山箕山と『色道大鏡』」。

4、「藤本箕山の生涯」（『国語・国文』第九巻第八号・同第十一号、昭和14年8月・11月）。『近世芸苑譜』（昭和60年11月八木書店刊）による。

5、同右書　P61。

6、『新編稀書複製会叢書』第二十八巻（平成2年10月臨川書店刊による）解説P423。

7、注4「藤本箕山の生涯」P59。

8、古賀十二郎『西洋医術伝来史』（昭和47年8月形成社刊）第一篇「栗崎流の興起」「栗崎道有正羽」など。同『長崎洋学史』（昭和41年3月長崎文献社刊）第七章「西洋医術六栗崎家の勃興」参照。長崎市寺町の真宗東林山深崇寺に代々の墓がある。

9、古賀氏『西洋医術伝来史』（前掲）には『金創本末撰記』に拠って栗崎流の興起を述べ、栗崎家墓碑とつき合せて次のように家系を示している（P23～31）。

初代 栗崎道喜
- 二代 道喜（正元）――道喜――道喜
- 道悦（正幸）――草場宗悦――道節
- 道保
- 三代 道有（正家）――延宝九・八・十三没 道有（正羽）

10、『犯科帳』一（森永種夫編、昭和33年～36年同刊）。長崎奉行所での判決記録である。

11、「『寛宝日記』と犯科帳」長崎文献叢書第二集第五巻（森永種夫・越中哲也校著。昭和52年3月長崎文献社刊）。古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』（昭和44年1月長崎文献社刊、平成7年11月新訂版刊）にも本件について紹介がある。

〔付記〕引用及び図版は『色道大鏡』は影印・翻刻版とも八木書店版を、『長崎土産』は近世文学資料類従・勉誠社版を使用した。いずれも必要箇所を分かりやすい形で掲出しているので、同書を参観いただければ幸いである。引用に際しルビを省略したところがある。